



# 沖繩復帰二〇年と新生社大党の展開をめぐって 一五集會

沖繩復帰一九九一年にあたる今年五月一日、沖繩自治連帯センター、(構造と戦略)研究会などによって構成された実行委員会によって、社大党政策部長(西原町議)と那覇義雄さんを講師に招いて集會が開かれた。

沖繩自治連帯センターの原田誠司さんが、まず問題提起を行った。①大田県政登場の意味、②復帰二〇年の転機とは、③政治の革新―社大党の展望という三つの項目に分けて、昨九〇年一月の大田革新県政の誕生という沖繩における政治状況の変化を切口として、更に「軍用地再契約問題」、「天皇植樹祭問題」、「新石垣空港建設問題」、「第三次沖繩振興計画問題」を取り上

げて、「復帰二〇年の転機」として、再生を目指している社大党の一党員として話したい、という趣旨の前置きをして話を始めた。七二年の「復帰」を高次元時代に迎えたこと、琉大で沖繩近代史を学び、新川明さん、川満信さんなどの「復帰論」に共感を覚えたこと、八二年の「復帰一〇年」を「島おこし」の地域における青年会運動の中で迎えたこと、また旧「沖自連」との出会いもそのころにあったこと、町会議員になって以後、社大党との係わりを強めて行ったことなどを、自らの経験の中から語った。

与那嶺さんは、前日の沖繩研究会の人の歓迎会で寝不足気味でと言いつつ、長期低迷状態から大田選挙の勝利を契機

## 91統一地方選

4月の統一地方選は、自民党の圧勝と社会党の惨敗、知事選での自公民相乗りに象徴される「総保守化」の一層の進行という何ともやり切れない結果に終わった。

特に酒田、浦和、国立、練馬での社共共闘の候補はすべて完敗し、戦後革新の終焉を完全に印象づけた。浦和、練馬の場合は社共共闘型の候補というより、市民運動が中心になり、それを社共が支持するという理想的な

### 頑強な生活保守と政治の衰退

自民党の圧勝、社会党の惨敗、総保守化の進行といった事態は、つまるところ現状維持的な生活保守主義が国民の大多数をおおいつくしていること、加えて湾岸戦争を経て一種の閉塞状況とバラバラな大国主義(特に反米的色彩をもつ)がはびこり、はじめのこの複合的結果である。一方の社会党は、八〇年代を通じて進行した資産格差

も変わらないこと、②ヤマト資本の流入、沖繩地域振興の財政投資が乱開発の結果をもたらすこと、③沖繩の経済的自立に結び付かないこと、④沖繩のアイデンティティが今こそ問われていること、⑤この三点を指摘した。最後に社大党が、九二年の選挙の中で問われている課題として、沖繩における土着と自立をテーマとする党の基本的方向性とアイデンティティが求められており、これを地域の市民、住民運動と共に活動し、ヤマトの地域政治勢力とも連携する中で模索したいということが述べられ、「万国渉の鐘」の碑文をひきながら、分離独立というよりは自立であり、沖繩の自立によるヤマトの変革を目指したいという展望で締めくくった。

代などを媒介に進行している。(周辺)での農民の自民党離れは一過的なもので、すなわちいづれまた自民党に戻るといふようなものではないことが、今回の地方選で垣間見れたといえよう。(八九年参院選での社会党への集票は文字どおり一過的なものであった。農村において社会党は所詮後援の下級官吏の党でしかない) 自民党は当然に従来の利益誘導システムの直し―再編を中央直結あるいは反中央などさまざまな振付をして行っており、これに對抗する地域自立の戦略が政治―経済―文化の総体にわたって問われている。都市部、例えば東京の場合が最も象徴的だが、社会党は二年前の都議選での大躍進がウソのように、今回の区議選では後退し、知事選では泡盛候補に近い得票しか得られなかった。

選挙民の大部分は現状維持の生活保守であり、資産格差の進行や汚職など歪みが表立った社会党に、しかし現状維持の基礎が問われたときは自民党に、というのが八〇年以降の基

域における政治勢力のあり方をめぐっての横浜市議選挙で「高速道路建設反対」を掲げて候補者を擁立し、当選を果たした経験からの問題提起などを受けて集會を終えた。

与那嶺さんが私達とほぼ同世代であるということもあって、地域における政治闘争のありかたを考えると、沖繩においても共感し合える印象をもてたが、はたして与那嶺さん自身はどうだったのだろうか。私達は、今年一月に沖繩の読谷村から新城さんを招いて講演会をおこなった。そのときにも感じたことだが、沖繩の人々の突き当たっている問題はどれを取っても、大きな問題でもあり、同時に私達自身の政治と社会のありようが分ちがたく結び付いている。しかも、私達自身の状況がそうであるように、時代の大きなうねりは、沖繩の

それぞれ地域・職場を基礎として作り出せるが我々自身にも突き付けられている。交流を深めながら自らの課題に取り組みしていきたい。

アジアと三里塚  
この集會は、リゾート開発という名の「侵略」、公共事業と外、とりわけアジアに向かつて拡大している現実に対して、空港(問題)を通して検証しているという内容で開かれた。

六月四日、東京・豊島区民センターにおいて、「アジアと三里塚から生活と環境破壊の開発を撃つ」を撃つ6・4東京集會が開かれた。



### 戸籍制度の解体

住民票統括差別記載を容認した東京地裁判決

武蔵野市の田中さん、福喜多さんのカップルが、子供の住民票統括差別記載をめぐって争っていた裁判の判決が、五月三日東京地裁で出た。

この裁判で、田中さん達は、住民票統括欄が婚外子を差別している(「嫡出子」は長女男、「非嫡出子」は子)点を主たる争点にしながら、戸籍制度がもつ差別性と、家族制度への疑問から、入籍を積極的に拒否する事実婚のカップルの主張を展開していった。「親の生き方で、子供まで差別していいのか?」「子供の権利条約の精神に明らかに違反している」「住民票が入学、就職と最も人目にふれる書類だ。そこに差別記載をすることは差別をふりまくことではないか」等々、原告の主張は理路整然と、被告・武蔵野市側を終始圧倒していた。

しかし判決は、予想されていたとはいえず、記載の取消請求一却下、損害賠償請求一棄却という

この二月、ドイツ、スウェーデンを視察する機会に恵まれた。でもその東西の壁跡も垣間見ることができました。

厄介視される?旧東独

すでに壁は跡形もなく消えてしまいましたが、全世界に歴史的な感動を呼び起こした事態の名残りは十分すぎるほど残っており、雪景色のなかで屹立するブランデンブルク門や旧東ドイツの人達かと推察される多くの屋台の土産物売りの光景(写真は大変印象的なものでした)しかし、視察したドイツのどこで聞いてもドイツ統一の感動は、むしろ財政問題を含め巨大な辺境を抱えて大変だ、という感想が返ってきたのが意外でした。旧東ドイツでの相次ぐ工場閉鎖と大量の失業者群、現在は一定の経済措置がはかられていますが、これも時限措置でこの二三年で解消されるとのことです。部外者である私たちが「社会主義」から資本主義への逆転的な移行、しかもそれが平和的に遂行された歴史をはじめ

の経験であり、誰もが予想できなかったこととして特別な感慨や感情を抱くのは当然としても、当事者にとっては課題自身の重さとしてそのような印象を持つのはやむを得ないのかなとも感じました。とはいえ「緑の党」からもそのような印象が返ってきたときは、どうしてもうなづけないある種の疑問が残らざるを得ませんでした。

西ドイツが本場に融合できるのかどうか、統一ECの中でどういう役割を發揮するのか、それがまた苦悩を深めつつある東欧に対してどういう影響を与えるかなど、今後の課題や疑問は限りなく膨らんでいくばかりです。

社会システムに直結する運動

今回のドイツ視察の目的の一つは環境をテーマとし、この各市民団体との交流にありました。環境問題を見る限り、相当根強い、オルタナティブの運動が成長しています。しかもこうした運動の展開、その発展が社会的(ヘゲモニー)に成長し、公的な社会的制度に直結し、より改善されて社会的システム化しているという点です。エコ・マークに象徴される市民的な運動もこの代表といえます。

街を歩いて感じたことですが、一人一人が消費についても自己の価値観をきちんともっているように思いました。乗用車などは年代ものを引き延ばし引き延ばし使っており、商品の過剰包装の排除、飲料水のビンの普及とリサイクルは、資源取奪・使い捨て・大量消費の日本社会との対極での市民社会の成熟を垣間見た気がしました。

各種の運動とそのヘゲモニーの成長が容易に社会システムの創造や改革に直結しやすいのは、ヨーロッパ全体がそうなのだが、連邦制度をふくめた地方的分権が発達し、民主主義がより身近になっていることも寄与しているのでは、と思います。

の経験であり、誰もが予想できなかったこととして特別な感慨や感情を抱くのは当然としても、当事者にとっては課題自身の重さとしてそのような印象を持つのはやむを得ないのかなとも感じました。とはいえ「緑の党」からもそのような印象が返ってきたときは、どうしてもうなづけないある種の疑問が残らざるを得ませんでした。

西ドイツが本場に融合できるのかどうか、統一ECの中でどういう役割を發揮するのか、それがまた苦悩を深めつつある東欧に対してどういう影響を与えるかなど、今後の課題や疑問は限りなく膨らんでいくばかりです。

社会システムに直結する運動

今回のドイツ視察の目的の一つは環境をテーマとし、この各市民団体との交流にありました。環境問題を見る限り、相当根強い、オルタナティブの運動が成長しています。しかもこうした運動の展開、その発展が社会的(ヘゲモニー)に成長し、公的な社会的制度に直結し、より改善されて社会的システム化しているという点です。エコ・マークに象徴される市民的な運動もこの代表といえます。

街を歩いて感じたことですが、一人一人が消費についても自己の価値観をきちんともっているように思いました。乗用車などは年代ものを引き延ばし引き延ばし使っており、商品の過剰包装の排除、飲料水のビンの普及とリサイクルは、資源取奪・使い捨て・大量消費の日本社会との対極での市民社会の成熟を垣間見た気がしました。

各種の運動とそのヘゲモニーの成長が容易に社会システムの創造や改革に直結しやすいのは、ヨーロッパ全体がそうなのだが、連邦制度をふくめた地方的分権が発達し、民主主義がより身近になっていることも寄与しているのでは、と思います。



の経験であり、誰もが予想できなかったこととして特別な感慨や感情を抱くのは当然としても、当事者にとっては課題自身の重さとしてそのような印象を持つのはやむを得ないのかなとも感じました。とはいえ「緑の党」からもそのような印象が返ってきたときは、どうしてもうなづけないある種の疑問が残らざるを得ませんでした。

西ドイツが本場に融合できるのかどうか、統一ECの中でどういう役割を發揮するのか、それがまた苦悩を深めつつある東欧に対してどういう影響を与えるかなど、今後の課題や疑問は限りなく膨らんでいくばかりです。

社会システムに直結する運動

今回のドイツ視察の目的の一つは環境をテーマとし、この各市民団体との交流にありました。環境問題を見る限り、相当根強い、オルタナティブの運動が成長しています。しかもこうした運動の展開、その発展が社会的(ヘゲモニー)に成長し、公的な社会的制度に直結し、より改善されて社会的システム化しているという点です。エコ・マークに象徴される市民的な運動もこの代表といえます。

街を歩いて感じたことですが、一人一人が消費についても自己の価値観をきちんともっているように思いました。乗用車などは年代ものを引き延ばし引き延ばし使っており、商品の過剰包装の排除、飲料水のビンの普及とリサイクルは、資源取奪・使い捨て・大量消費の日本社会との対極での市民社会の成熟を垣間見た気がしました。

各種の運動とそのヘゲモニーの成長が容易に社会システムの創造や改革に直結しやすいのは、ヨーロッパ全体がそうなのだが、連邦制度をふくめた地方的分権が発達し、民主主義がより身近になっていることも寄与しているのでは、と思います。